

# 女性県会議員・田中花子の自筆ノート

— 『人生記録』をよむ (2) —

野 崎 喜代美

## はじめに

本稿は、鳥取県で最初の女性県会議員となった田中花子の回顧録『人生記録』を翻刻紹介するものである。

すでに『研究紀要』第四号で、田中花子が県会議員になるまでと、議員一年目の活躍の様子を翻刻紹介したが、今回は花子が生涯をかけて取り組んだ婦人会活動に焦点をあてる。対象とするのは、『人生記録』其一、其二、其三である。ただ、同資料は、晩年に思いつくままに書かれた、という特徴があるため、必ずしも時代を追った記述にはなっていない。勿論、婦人会関係以外の記述も含まれている。そこで、翻刻のスタイルとして、該当部分の抜粋という形

をとった。さらに、『研究紀要』第四号で翻刻紹介した箇所も、一部掲載した。

また、昭和五六（一九八一）年に花子が出版した『歌文集「無」』に、『人生記録』（昭和四四年一月）昭和四六年七月執筆）に近似した部分がある。これは、『人生記録』が底本にされたからだと判断されるが、まったくの同一文ではないので掲載することとした。

## 【凡例】

一 原文は、文章の区切りが不明瞭なため、翻刻者の判断により、一字下げによる改行を行うとともに句読点及び会話文には「」を付した。

- 二 明らかな誤字・脱字が判明する部分については、右横の（ ）内に、（○○）と記した。
- 三 繰り返し文字は、ひらがなには（、ゞ）を、カタカナには（、ゞ）を付した。
- 四 原文の空欄部分には、を付した。
- 五 固有名詞以外の旧字体は、原則新字体に改めた。
- 六 不適切と思われる表記箇所には□□を充てた。

## 〈翻刻文〉

昭和五年、浜口内閣の時である。日本の先進婦人市川房枝等の手によって婦人参政権運動が始った。衆貴両院にその申請はきびしく出された。衆議院では参政権はまだ早いと公民権は与へようと決議し貴族院に送った。貴族院では時期尚早という理由によって取下げられてしまった。之二対して市川等婦人達の運動は激しかった。その直後気高郡婦人総会が開催されて私は演壇に立った。演題は婦人参政権問題であった。私は政治の理念から家庭生活と政治を論じ婦人に参政権を与へるべしと結んだ。これは一同に感銘を与へる事おびただしかった。その翌日鳥取県婦人会が誕生し

（昭和十一年頃）、第一回総会を米子市に開く事になり各郡から弁論選手を出すべく要請されていた。そこに私の気高郡二於ける婦人参政権問題演説だ。会終了後気高郡婦人会長三橋豊蔵氏、湖山村の三十年間連続校長をつとめた田中久秋氏に私は呼ばれた。二人の願は明日の県婦人総会に今日の演題で話してくれとの事だった。それは仲々むづかしい事を私はつぶさに断った。姑の承諾、夫の承諾、之が得られないと思うとう封建時代の嫁の立場の六かしさを話した。田中久秋氏は「道夫君は俺の教子だ、私が依頼するのにいやは云わせない。必ず私が直接要請二行くが事は明日の事。私が左様云ったといつて承諾してほしい」という。三橋氏は姑に話に行くという。夕刻まで二人の切実な望をきいてふり切れず泣き帰った私はおそろしく姑に話した。姑は言下にきつくいった。「それはならぬ。何しに米子まで行って大きい声をせねばならぬ。私も婦人会長（湖山）も役員もつとめた事もあるけれど外にまで行って大きい声したりせんでもよかった。オーネ会に出なくてもすむものだ」と益々きびしく開口のひまもない。ひじかれた私は淋しく夫の帰宅を待った。松崎に行った道夫は仲々帰らず汽車の着く毎二いらくする。ようやく夜の十一時の汽車で帰宅したの

だ。今日のいきさつを詳細に話したが道夫も米子迄行く必要はないという結論だった。三橋氏、田中氏に何とことわりするのか。苦んだその旨を道夫に話した。ようやく夫の承諾が出たのが夜半一時。それから心の準備して五時の汽車二乗り米子に乗込んだ。大丸まげにピンクの鹿の子だったと人様の方が三十年後も仰る。県の総会だから県の要人等相当来賓も多い。来会者もおびただしい。三名の意見発表の中私とも一人鳥取市婦人は参政権に賛成論を唱へた。日野代表は「私は反対意見を持つて出たけれど今の意見をきいて私の意見は取下げます」とあっさり云つて発言を棄権した。少し時間が延長になつたらみはあつたと私は察したけれど、私の発言は人気を集中した。大丸まげの純日本婦人姿の私の口からあまりにも斬新過ぎる婦人参政権問題のとう／＼とほとぼり出たのに来賓も会員も呆気にとられた様子であつた。未来の県会議員：等々、やかれた。帰りの汽車の中近い席のさ、やきがきこえる。「ランブ桑田の娘さんだつて」ランブ桑田：私には懐かしい言葉だ。之は私の子供時代の実家：倉吉の桑田という富豪の分家で、ランブの商売していた商家であつたから、人呼んでランブ桑田と称した。このさ、やきに私はとても反省させられた。恐らくこ

て帰つた婦人から聞いた」という。問題は内容のとり方だと私の意見を説明したけど仲々論はつきぬ。和俊はもう今の世にそれ位の事は考へるのが至当だという。内容は想像しての観念論であつた。谷川の反論はとでもきびしく、私と和俊、谷川と敏夫、この対立は物凄く夜の更けるも忘れて対立していた。そして夜半二時頃帰宅した道夫は驚いて何事かとときく。私はその経過を話した。道夫曰く「わしはその内容をつぶさに読んだ。題名はきびしいかしらぬが、内容は当然の事の必要性をといっている。現代の婦人はこれ位の考がなくして生活が出来るか。」これで私方の勝利ときままり一回寝についた。

貞の死後間も無くの事、鳥取市中の電柱にベタベタはられたポスターに田中花子独演会というのがあつた。市役所で開催とのポスターだ。私は同姓同名であるものだナーという気持で軽く見て帰宅した。何時もより早く帰つた父永治は私を呼んだ。「お前は今日市役所に行ったのか？何しに行った？」仲々きびしい質問だ。私「行きました。電灯工夫が頼んだ税金を支払つてやる為に行きました」今日の講演会には行かなかつたか「ハイ、行きません」これでようやく父の顔

れは今日の演説の話をしているだろう。娘というものは嫁してからでも実家につながる。其子が善い事をしてても悪い事をしてても出るはその生家の事だ。今日はよい方で実家の名の出た事は嬉しいが、悪で出ないよ

うに心がけねばならぬとしみ／＼思つた。その翌日鳥取に出て帰宅した道夫はうれしげに話してくれた。「今日遠藤重先生(鳥取盲啞学校等はじめた教育家の大家)から「田中君一寸」と招かれ室二入ると一枚のスケッチを出して「これは誰かわかるか？」という。丸まげの女性の姿だ。「これは昨日大演説された君の奥さんのスケッチよ。私は昨日婦人大会に出席して喜んでこのスケッチを記念にしたよ」と云われたという。県の教育部長は「君の妻君は舌鋒鋭く内容は温建だね、実によかつたよ」と激賞されたと云う。私も内心うれしかつた。道夫も同感だつたと思う。

其後間も無く七人兄弟が皆揃つた。夜二入つて道夫はまだ鳥取から帰宅しない。六人は集つて雑談していた。その時谷川寿夫(末妹つま子の夫)は姉さんの先日の演説は婦人を迷はすものだ。今の時世に婦人参政権等余りとつびすぎると弾丸をうち出した敏夫。正明はこれに共鳴した。和俊は私に同調した。私は直接私の意見を聞いて批判するのか？と反問した。「聞いて

がほころびた。実はこの評判が高く田中の嫁さんが今日は演説されるげな、聞きにいこうと□□町内婦人は皆き、に行くといふと騒いでいるという。知事の秘書はやつて来て本当に貴家の嫁さんが講演されるのですか、もしそれ丈の教養をおもちの嫁さんなら知事夫人の心の友になつてほしいとの事を伝え二来たという。警察部長からは本当に貴家の嫁さんですか、それなら大に尊敬する。只警察としては名をかたつて人気をあげるものではないか、ソーサクしているという警察らしい言分だつた。之に對し、父は「うちの嫁は大きな声もようせぬおとなしい嫁です。とても人の前で物も言う女ではありません。それハ何かの間違いでしょう」と断つたけど気にか、つたので早く帰つて見たという。

#### 私の弁論感

これより少し前、全国的に矯世会というキリスト会の会があり、人の道を正しく社会をよくする運動があつた。その会に出席して見た。白窪落実という女性の講演があつた。はじめて女性の講演を壇上にきいた私はみ入るように熱心にきいた。そして女性でもこれ丈力強い演説が出来るものか？というよるこびと力強

さに心がおどった時がある。この時から女性の演説に自信のようなものを感じたけれど、それだから私もやろうとはつゆ考へもしなかったのだ。だから多分その頃は舅の見たようにおとなしい虫も殺さぬ嫁であつたと思う。

婦人会の弁論で有名になつた私はずいぶん多くの婦人の前では演説なれて来たが一般に人前に立つた事はなかつた。道夫も度々県会二立候補し選挙戦もやったけど一度も街頭演説はやらなかつた。そして三期か四期の頃だつたと思う。八頭郡から西垣寛(寛治)という政友会の友士が出ていた。処が同じ地盤で山根繁実(三三)さんが立つという。二人が立つて二人当選は六かしい。山根に次期まで待てと交渉しても聞入れない。とうとう二人共立候補としまつたという。道夫は困つたものだ、西垣が不利だと心配していた。そしていよいよ演説開始の日が来た。私は風邪にて数日前から寝ていた。鳥取の道夫から電話が来た。「今日から演説を始めようとしている矢先西垣君はもう腸炎で入院だ。このまゝ引下るわけにいかぬからお前が西垣の応援演説二立て」という厳命だ。私は病氣だと断つてもきき、入れられない。薬を下げて出てこいと事。いたし方無

しよう。お父さんに何とおうか？」道夫は「お前はやめよう。お前の代りを豊田さんにやってもらうようにしよう」ときめた。父は一言もないけれど道夫も私も父に演説に行つて来ますと挨拶をする勇氣が出ないのだ。父は二階の居間の長火鉢前に無言で坐つている丈なのに……。この時程父の無言の威圧を感じた事はなかつた。

(中略)

#### 婦人会

大正七年三月私が田中家の人になつた頃、当時湖山村駐在巡查杉本氏と校長田中久秋氏、その小学校の教諭に田中まささんという女教員があつた。その人と宅に度々御出になり婦人会を設立すべき社会状況を熱心に説かれた。特に杉本巡查の熱はつかれたもの、ようだった。若嫁の私は只その端から聞かぬ程度のもので、専ら母マス(四八才)との交渉であつた。とうとうみのもつて湖山村に県下はじめての婦人会が誕生した。「このや」(上山のオバアサン)が会長、母マス、影井(宮の前)等は役員という事にきまつた。家でパン等作り、お宮こもりして婦人会をよく開かれた。後で

く、いく日入浴してないので湯を沸し垢を落して薬ビン下げてハイヤーを走らせた。八頭郡に入り三ヶ所位演説した。人はよく集まりよくきいてくれた。とてもうれしく楽しかった。八頭の御大民政党の大人黒田藤重(重三)氏の演説でもこれ丈の人は集らなかつたというほど集てくれた。女性弁士という珍しいものにつられたのだと思う。私にして見れば婦人相手の演説なら二千人三千人を前にしてし、吼(こゑ)した度胸をもっているけれど、男女一般を前にしてのし、吼ははじめてだつた。でも一生懸命やつた。単衣の訪問着に黒の羽織といういでたちだ。西垣派の喜びは極二達した。道夫も得意だつた。そして後を託されたのだ。若桜がはげしいから今度は若桜中心にやってくれとの交渉だ。麗々しく新聞紙上に賑かに書かれ珍しい女性弁士のうわさはにぎやかだ。何日には若桜に私が行くと新聞二書かれた。その日道夫は豊田先生と一しよに鳥取二帰つて来た。そして家に戻つた。西垣派から若桜二来てくれと三人も使者が来る。私は行く決心をしていた。その時突然父が黙して帰つて来て自分の部屋に黙したま、坐つている。その威厳におされた。恐しくて「演説二行きます」と言出せれぬ何ものかに抑された。時間にはせまる。当惑して道夫に相談した。「どうしま

影井さんは「花子さんはじめは会に出て爪をいぢつていたもんだ」とかっ(こゝろ)ばして喜んでいた。私が妊娠した時つわりが烈しくて困っていると姑は今日は婦人総会だから出て見なさい、気が変つて病氣もよくなるかもしれん。これはつわりなのだから精神でなおる、と無理二出席したけれど嘔吐は癒えず途中で帰つて寝てしまつた記憶がある。

(以上、「人生記録」其二)

#### 気高郡婦人会の事

昭和三年気高郡婦人会が生れた。会長は三橋豊蔵、副会長本村校長、浜村小学校長だ。これは前から形丈ある愛国婦人会(会長知事夫人)又戦争中出来た国防婦人会(会長木下静造(浜村町長))と並んで系統婦人会とよんでいた。愛国は形丈として国防は会長木下氏は郡内婦人会は一本で行くべきだ。分裂する事は徒にまさつを生じて実は上らない。挙げて一本化して婦人の向上につとめようという大乗の見地から六三連隊の国防本部からは矢のさいそくがあるのに気にもかけず気高郡婦人の為に……という一念で系統婦人会を一本にし、国防はその一つの内容として行じるようにされた(部的存在)。お蔭で気高郡婦人会は県下でも最優秀の

活動が出来たのだと思う。私が昭和十一年頃丸まげ姿で婦人参政権論をやったのもこの頃である。そして世は婦人の力を認識し初め婦人会長は婦人であるという事になり私が会長二なった頃はまだ気高郡内でもへき地にはまだ婦人会は浸透していなかった。

会長田中花子、副会長佐々木智勢理、中村そう

日光 逢坂 向国安 青谷 鳥取

理事太田みき 井山峯 林愛子 岸田テル 田蓑千枝子等そうくたる人物揃い、それ二加へて片岡先生が立案計画に緻密な頭脳をかたむけて下さる。この陣営で押も押されもせぬ形で出発した。役員会の時には皆で小黒板を持ち出し乍ら自らの意見をのべ合ひ話し合ひ真剣に討議した。実に面白く希望にもえた。

先づ部落目当の運動をはじめようときめた。十二名の役員を六班に分けて二人宛部処につき県下の学識経験者を一人を配した。之はおやぢ(道夫が県会議員)の七光りと私は自覚していたが、県下の人材が卒先して参加して下さる。村上孝義氏、黒田藤重氏、鶴田憲次氏等々この成果は大きかった。部落く同調の声が上り婦人会がもれ上った。はじめての我々の来訪に部落の人々は集って「はじめて世の中の事がわかりました。今日は一年生、来年も一度来て下さい。上達

える。一寸後をふり返った、と後何米かに一人の外トウを着た男の一人が目散二飛ぶように歩いている。あだかも私を追うかのように。胸の動きは益々はげしく鳴る。□□百斗の水を背二かけられるような恐ろしさに身の毛がよだつ、と共に私も一目散のかけ足だ。ちよこくふりむくと男との距離はちままるばかりだ。もっと早くく。いく度か自分に号令しながら苦しい息で走りつづけた。精魂つき果て、最後に後をふりむいたのは家二近い大橋の上であった。トタンに「田中さん何チューよう歩かれますまいナー、どう急いでも追付けなんだ」と追かけ男はいう。我に返ってよくく雪明りに男の顔と声を合せた。何と賀露から豊実小学校長二通はれる三好兵太郎先生ではないか。ぐったりした私は声も出なかった。三好校長はいう。山の麓で徳田さん二会つたら、「田中さんが一人帰っていられるから早く追ついて一しよに帰って上げて下さい」と云はれたので、それは危いと一生懸命私を追ったのだという。狂人と間違へて走りつづけた私にとうく村二入る迄追付けなかったと大笑された。家では大さわぎ。物に動じぬ道夫まで玄関に出て差図している。女中と滋子はこれで三回大橋まで出て見ましたと大笑する。「人さわがせもい、処だ」と道夫に笑

していますから」と力強く立上ってくれた。(明治村榎原部落)その通り翌年はひけも取らぬ立派な婦人会が出来上っていた。

我々は冬の寒い農閑キを利用しモンペイに地下足袋長くつ姿で山を一つこえ二つこえ部落へくと運動をつづけた。豊実の徳田静子さんと私と組んで明治谷に行つた時の事、出発の早朝はまだ大雪が凍ついてカラく、長くつはすべて歩行困難と、地下足袋にモンペイで出かけた。道夫は「気をつけて行ってくるように」と送ってくれた。布勢の先で徳田さんと落合い山を二つこえねばならぬ。□□□□としても一つ山をこえ目的地について部落の婦人方と談合し、その日の成果を話し合ひ乍ら帰りのはじめの峠二さしか、った。そして次の峠についた頃冬の陽は暮れるに早くもう真暗になる。徳田さんはこの山の向うだ。私のために山頂まで送って下さった。サヨナラく、こだまする二人のサヨナラは暗の山深く消えて行く。かすかにのこる友のサヨナラを便りに一人山を降った。トッピー暮れた雪の道は昼間の太陽に溶けて雪は水になり地下足袋はピツシヨリ。でも一時も早く家にたどりつかねばならぬ。犬の子一匹猫の子一匹通らぬ街道を息をこらして走った。足山村の淡い家の灯がポツンとかすかに見

われるが道夫も安堵したと大喜してくれた。

戦時中大日本婦人会というのが全国に作られ、私は気高郡婦人会長になった。そして婦人学級を提唱した。大日本婦人会事も局長は竹本定治氏。早速私は以前気高郡婦人会で執行した部落研習会を提案し、計画書を出して実行を誓った。竹本氏は「何がこんなことが出来るものか、出来たら貴女は県の総ム部長二なってもらいます」とうそふいた。私は笑った。「さつとやります。私共には経験がありますから。」そして実施し成功した。竹本氏のみならず大政翼賛会の隊長黒田藤重氏も驚いた。そして賞賛した。そしてわざく気高郡婦人会役員会員を招へいして役所で役員会を開かせてその計画を習った。爾後翼賛会の企画は気高郡婦人会の企画の立て方と同じになった。

本部から事ム局に戦争用の縄作を命令された。朝早くから晩までひまさへあれば皆で縄をなう。道夫は田舎の子、とても上手。町に育つた私にはどうしても出来ない。何回手を取って教へられても仲々うまく出来ない。私は局長に進言した。「気高郡の中にも青谷町鹿野町は縄は出来ないけれど飛行機二必要だ」と和紙の製造には自信がある。自信のある和紙、しかも必要な和紙製造をやめて出来ない縄をなわせる等不合理

も甚だしい。政府は大綱丈きめて詳細は郡二委せると  
いう断を下して下さい」と申入れた。中々き、入れな  
いが私は敢然と進んだ。「ともかく私は気高郡を合理  
的の二国の為ニ全精力を尽させますから」ととうく私  
の意を通してしまった。中々強情ぶりを發揮したもの  
だ。竹本局長もついに我を折ってくれた。

戦のさ中気高郡婦人会は津々浦々に組織網が出来た  
ので之を基にして研習をつんだ。社会状況を承知しよ  
うとつとめた。貯金には積極的に取組んだ。我々幹部  
と隣村の小学校女先生一人にソロバンを持たせて各部  
落を廻った。そして女先生にソロバンをはじかせて各  
部落の貯金高を確認させ増高を契はせた。それ二より  
気高郡婦人会の貯金高はグンぐ群を抜いて増した。  
戦時中にはカリ肥料が家庭になくなった。菜園作りに  
はどうしてもカリ肥料が必要なのだ。それで一案を出  
した。庭の土を風呂釜でもやいてカリ肥料代用にして  
作物をよくみらせ食物の増産をはかる事だった。貯  
蓄と増産これがその当時気高郡婦人会の標語であつた  
のだ。そして家の中の金、銀、銅、鉄、あらゆる品を  
ひっくり返して供出してしまった。金の指輪に金のか  
んざし、銀製のかずくの置物、これには父永治の功  
労に対して祝賀にいたゞいた品、寿祝にもらつたとい

た。全国に長い歴史を持った婦人会は消えたのだ。軍  
国政府は何を考へて解散したのか、いまだに私には分  
らない。とても淋しかった。悲しかった。私共が生ん  
だ婦人会が懐しかった。そして終戦を迎へた。ラヂオ  
を聞くようにとの事でスイッチを入れたけれど、天皇  
陛下の御声は一寸も判らなかつたけれど、戦に敗けた  
という事だと聞かされて皆声を立て、泣いた。氏神様  
ニ村民は集つてオイぐ泣いた。

(中略)

そして世の中は雑然とした混沌とした、ヤミとい  
うのが横行し、汽車にのるには窓ガラスをこわして入  
るのが常識のようになった。道徳等どこを吹く風か？  
という有様であつた。戦時中米がないとおかゆの中ニ  
大根を小さく切つて煮込んで食べた。遂にはカボチャ  
の茎まで煮て食べた。

醤油もなかつたが、家では作っていたから醤油はふ  
自由どころか人にも上げた。丁度戦時中におきた大地  
震の一寸前、婦人会役員の日光村の太田みきさんは  
「田中さんは婦人会長として人の事に多忙を極めて自  
分の醤油もろくに作れないから私が行て醤油を仕込ん

う飾り物のかずく。見ていてあかぬこの品々は戦二  
勝つに役立つたのだらうか？錫の盃、銅の床間の置  
物エビ：今でも目にかぶあの数々の品、火鉢も揃の  
十人前とかびんかけ、道夫の毎日愛用していた部屋の  
茶釜、これは私も最後まで使った。毎日夫婦でこの茶  
釜で湯を沸してたてた薄茶―これはとても執着の多い  
ものだった：堀内様にもそれと同じ思いの大きい真鍮  
のビンカケがあつた。「田中の花子さんがあの茶釜を  
供出したらわしもこのびんかけを出す」といつて堀内  
氏もがんばつた。そして二家とも同時二泣くく別を  
つけて出したのだ。これを何かでこわしたと聞いた  
時、スーと血が引いていくような淋しいかなしみを身  
一杯に覚えた。正明(六男)が満州から持つて帰つて  
くれた鉄の大鍋、これは鯉鮒等を油でいため支那料理  
して頭の骨から全部食べうる料理二使う鍋なのだ。一  
回二食用油が最低二升は入る。とても油が手二入らぬ  
時なので之を使へる時が一生の中もう来ない気でこれ  
も手ばなした。二度と入手出来ないのに。敗戦と聞  
いた時これらの品々はまぼろしに立つて忘れ得なかつ  
た。一図に思いつめ政府を信頼していた私の愚さを  
しみぐ泣いた。

終戦の直前大日本婦人会は政府の命令により解散し  
で上げる」と泊り込んで仕込をやつて下さつた。その  
前に前年度仕込んだ分をこしたり火当したりとてもよ  
く出来て、一番二番三番しようゆまでしほれて、一番  
醤油が一石以上もあり、エンソ倉に棚一杯に並べて  
よるこんだ。そして新しい仕込桶(私の背より高く毎  
日ふみ台の上で中をまぜていた)の種はまだ塩水とま  
ざり悪く、上に浮いているのを毎日ゆつくりくまぜ  
てならしている時、俄に地震に見舞はれ、棚の一升ビ  
ンは下に落ち新しい仕込み桶の中にとびこみ、桶は大  
揺のため上に浮いていた新しいもろみは外に流れ出て  
しまうという始末。でもピンは一ヶも割れず島川中の  
各家二一升づ、醤油を配る事が出来、人から喜ばれ  
た。

世の中ニヤミぐとやかましくなつた時「婦人会は  
無くなつたのだからもうやみをしてい、のだ」とい  
う無自覚な婦人の声が私共の耳に入った。この言葉は  
私共の肺腑をえぐるに充分であつた。私や中村そう、  
田養千枝、岸田テル等集つて語つた。この婦人の声は  
かつて婦人会というものがどれ丈社会の秩序を守るの  
に役立つていたかを証明するものであつた。はじめて  
私は私達がやつて来た婦人会の価値というものをはつ  
きり知る事が出来た。そして我々のやるべき道を考へ

た。併し封建思想の中に生れ育てられ、上下の道德丈知っている私達が、今敗戦というみぢめさに生れてはじめて遭遇し、民主々義という横の手つなぎの道德でやれと云われてもしつくり身に覚れないのだ。どうして生活していくのかさえ判らない。その私等が指導者になって婦人会を作るといふ事は如何に婦人会が必要と云つても逆立しても出来るものではない。集つた人にして自分がやろうという人は一人もない。結局個人が民主々義というものを先づ勉強する必要があると議決し、然らばどうしてその道をひらくのか？先づ我々が主催して気高廿六ヶ町村に呼びかけて新しい講演会を持つべき事、講師には自由思想の持主だった日本海新聞主筆池田紫<sup>(兼徳)</sup>氏を招く事をきめ、廿六ヶ町村のこれ迄の幹部の方にその趣志を伝え、強制の無い集りを要望した処、当時集つた人の多いのに驚いた。湖山小学校講堂は一杯の盛況である。「私は真の自由思想の人間である。戦時中は政府のダン庄により物も云へなかつたが、今日は何も云へる時二なつたので、今日はじめて赤ら、に私の気持を思う存分云はせてもらうから聞いて下さい」と前置して真に赤ら、の話を二時間された。はじめはチョイ／＼眠る人も見かけたけれど、話が高潮に達するや聴衆の目はらん／＼とかゞや

そんなら我々もそのように考へ直さねばならない。今日こゝに集つた婦人は少しは判りましたが、気高郡にもまだ冬眠している婦人が二千近くもいるのだ。この冬眠を如何にしてさまして上げうるか？之が議題になり、それは婦人会を作る事、それによつてさましてやるという。その運営指導は誰がやるのか、この中にはその資格のある人も自信のある人もない。併し自信資格が出来てからではおそすぎる。では如何にすべきか？結局田中花子と片岡氣録が産婆役になり、気高郡内に強制でなく自由に呼びかけて集合させ共に勉強する会を作るべしという事に決議され、片岡先生と私はその準備に取かゝつた。そして日をきめて廿六ヶ町村二手紙を出し、趣志を書いて自由な気で賛同される人は集つて下さいと案内を出した。その日廿五町村は集つた。一ヶ村神戸は、その集会時間二は神戸は三時に出発せねば間二合ハぬので白紙委任しますからという電話がかり、これで気高郡全員揃つて会議をはじめ、合意によつて終戦後はじめて我等の手で気高郡婦人会という新しいものを作る事が出来たのだ。昭和二十一年春である。その創立の日私は会長として式辞をのべた。初に「はえば立て立てば歩めの親心：およそ親心とは」と続けた時、会場寂として音も無く唯すゝり泣

き両手をしつかとこぶしをにぎり何か恐ろしい空気を感じた。二時間の講演を終ると片岡先生は私にさ、やいた。「何か感じられませんか」私は「もつと納得させぬと恐ろしい反抗が起るような予感がして恐ろしい」というと、「も一度ねり出ししましょう」と決り、昼食事後今度は一同円座になつて片岡先生を中心に今日の講演のねり直しをはじめた。まづ集つた人々の意見をきいた。皆よく意見をはいた。「汽車もレールを外れるとてんぷくします。今日の話はレールを外れていた」と大声に叫ぶ人もあり、「此度の戦は日本婦人がアメリカ婦人に負けたと云つた、我々日本婦人は世界中央に出る者のない立派な婦人と自負している。それなのにアメリカに負けたと云われて残念だ」と泣きじゃくり乍ら訴へる婦人もある、等々。総じて今日の講演、自由主義二対する反パツで終始したのだ。片岡先生は云う。「貴女方は生れるとから今日まで今皆さんの云われた通りの考方で育つてきたのだが、今日から日本は民主々義の世に變つたのだ。貴女方は牛の胃のように、も一度口にもどしてかみ直して下さい」と、午前の話を一つ／＼取上げてかんでふくめるように話してくれた。その時会員の中から溜息が出た。アア日本はそんなに変つたとは今が今まで知らなかつた。

の声のみ高かつた感激を思出す。之は気高郡婦人会を正しく清く育てる為に木下静造氏が六三連隊に出て自己の立場の悪くなるのも願はず只々婦人の育成に<sup>(いちぢ)</sup>一心してかくも成長させて頂いた親心を心から感謝した、会長田中花子の真心だつたと思います。美しい女性の心の清い温さのすゝり泣でした。かくて気高郡婦人会は初めて民主的ニ立上りはい上り勉強をつづけたのだ。

当時鳥取県内の各郡市に婦人会が新しく結成された処もあり、まだの処もあつた。気高郡が各郡に呼びかけて県内婦人会の協議会のような懇親会のようなものを作るべく企画にかかつている時であつた。昭和二十一年婦人参政権が与へられ、代議士選挙に鳥取県から産婆の田中たつ氏が立候補され、はじめての婦人を加へた投票に連記投票が施行せられ、田中たつ氏は目出度く初の婦人議員としての栄冠をかち得た。

(中略)：『研究紀要』第四号八三頁から九二頁に翻刻のため

県会議員に当選するや県の婦人会設立の必要を感じていた私は、当時の社会教育課長坂出雅己氏と(後の三朝町長)協議を重ねた。鳥取市婦人会の近藤寿子は

インテリで新しい知識の持主。この人を引入れたいと思ひ、その方向ニ進んだ。そして昭和二十二年七月鳥取県婦人団体協議会が誕生した。まことに新しい理想的な着想と思つた。あらゆる階層ニある婦人が集つて共通なものを研究し合ひ、その立場ニおいて行動するというとても新しい考へ方で、その各層からの出席を求めて総会を持つた。第一回設立総会には知事（西尾愛治）、進駐軍司令官も出席しメッセージをよんで喜んだ。集つた婦人の中には赤線地帯の婦人も堂々と華やかな姿を見せ、万国旗のような花の咲いたような華美のもの、その中で私共にははじめてのたどくしい民主的な会ギが進められ、選挙により会長田中花子（県会議員）、副会長田中たつ（衆議院議員）、近藤寿子（医師）と決定し花々しく設立したので。

（中略）……この間に鳥取市婦人団体協議会が県婦人団体協議会を脱退した。理由は会費三十円が捻出出来ないからとある。

でも鳥取市婦人会が県を抜けて単独の行爲をつづけている事は事ム上にも、又対外的の問題の時にも困つてしまつた。何かの問題の時ニそのチャンスなをねら

ニ研討をはじめた。改組の問題、改組すればその名称、改組した婦人会に於て婦人新聞を發行する。これは各町村二百五十円出資という事にして五万円を作製、後五万円は会長の借金とし計拾万円の資金にて出發しよう。これは一部二十円として五千人の講読料拾万円とし一ヶ月の講読料を以て資金としたのだ。

「婦人新聞の欄は又後で記す」

かくして各町村に真劍ニ討議を重ねている間試練と考へた。米子は案の定破戒してしまつた。いよく改組は急用の問題となつた。そして翌年三月重要問題をか、えた婦人会役員会は開かれた。重しんにつき当り真劍ニ討議した役員は昂奮ニや、赤くなつていた。会議室には熱氣がこもつた。愈々発表の結果改組する事。職業婦人と雖も家庭婦人です。郡以下ニ於て団体協議会は成立たない。家庭婦人が相寄つて協議研討して家政をよくし、社会を住みよくする事に留意するの婦人会の重大役割であり、これを根かんとして婦人運動をする。随て婦人会は連合婦人会とし、かつてのピラミッド型の婦人会でなく、横の手つなぎの運動である。そして県に於てのみ婦人団体協議会の名称をのこし、連合婦人会から世話役二名を選出、これによつて運営をする。屋上屋を重ねる事のないように、世話

い、和解したいものとチャンスなをねらつていた。その中、昭和二十三年頃の役員会の頃から団体協議会ニ対する不満の聲が上つた。婦人団体協議会に出席する時借りて来た猫みたいだ。何一つ自己の主張も話合も出来ぬ。教員組合の人々があられもない立膝でバンバン発言する。家庭の婦人とは正反對の姿せいに對して反感のみ沸き、この中ニ自己の婦人会としてのいく道は見出せない。我々は我々の生活の中から上つてくる婦人問題を取上げて研究討議するのであつて、今の団体婦人会のように職場の問題を提出してはついてゆけないという。その頃安来にある立会社で首切り問題がおこり、これを対処する労働組合が必死ニ反抗して上立つた。それを婦人会ニ持出したのだ。米子市婦人団体協議会は三十いくつの小団体が参かし、中ニ友の会も入つていた。その友の会の中央から鳥取のように政治に巻込まれて婦人団体からは脱退せよと申達があり、とうとう脱退してしまつた。処が米子市婦人団体の会長を高教組の九人程の中で会長を取つてしまつた。婦人団体協議会の編成者が問題ニなつたのと同時である。併し米子市が少数の教師会がリード決した今日運営によつて如何にか出来るではないか。今一年研究の余裕をもつ事をきめた。そして一年各町村毎ニ真劍

役は井口須賀野、小谷くに、二人ときめた。此記やくは其後二、三年後全国的に婦人少年局廃止の決定しようとした時「今こそ婦人団体協ギ会が立つ時」と二人の世話人をして活動させた。廃止はやめ、今尚婦人少年局は継続している。

（以上、「人生記録」其二）

### 戦争

戦後関係国アメリカ イギリス オランダ フランス フィリッピン 六ヶ国から戦犯として扱はれた兵士が相当あつた。中には戦犯者として銃殺された人もかなりあつた。その生存者が東京巢鴨の刑務所に収容されていた。東條英樹大将も巢鴨の一室にあつた。我等の婦人会の世話をしてくれた亀本房子氏の夫哲氏もその中に収容され、鳥取県人は十一名いた。その戦犯釈放運動をやつた。先づ婦人会員一人一円出して五万円の金を作りその費用ニあてた。代表者が上京して六ヶ国の大使館を訪問して陳情書を手渡し口頭で訴へた。英国大使館からの応対は日本語でやつた。開口一番例へ戦争であつても人を殺す罪は大きいと戦犯を先第一に可定した。どぎもを抜かれた形の私はそれではならじと一心に訴へた。フィリッピンは非

常に厚意的であり「鳥取県の人名を知らせ」とまで云はれて感謝した。オランダの支関にハチ須賀侯の家紋入の大金庫があつた事、フランスの大使館にしばし休けいしてパターの味を（映画で見るのみの）味つた事、アメリカは今大使が飛行キにのりかけていて時間が無いので会へないが後で必ず返事すると約束し、後日私宛に親書がとゞき之を持って西尾知事を訪れ日本やくを願つた処「これ丈の大事業をやり乍らなぜ知事に知らせなかつたか」と云はれ我々単独でやつた事を反省した。アメリカ大使館に行く時には沢田廉三氏が附添つてくれられ、巢鴨收容所に入つた時と同じく沢田大使が同行して下され、鳥取県人十一名と会つて郷土の民謡をと大使自ら美声でうたはれ婦人もうたつた。母に会つたようだと十一名は異口同音によるからだ。帰る時鉄の銚子<sup>(銚子)</sup>、別れる時間、双方後髪を引かる、思いでいく度かためらい後戻り涙して心を決して別れた。

(差込紙片より)

戦犯釈放運動に使用した残金(五万ノ中)は鳥取県内の戦犯としてすでに銃殺されていた人々を弔つた。私は古海に行った。この日未亡人は言った。「子供が

中学一年になります。今日婦人会長が来て下さると話しましたら『矢張りお父さんは悪い事をしていたのではないね。今日婦人会長さんが見えるのは私達の正しかった事を言つて下さるのだ』と大喜びで仏だんを自分で掃除して喜び勇んで学校へ行きました」と泣かれた。私も泣き乍ら仏を訪れた事をよかつたとしみじく申合つた。これは鳥取県の婦人一人一円の金で出来たのだ。婦人会という組織の有難<sup>(有難さ)</sup>かたさを痛感した。

(以上、「人生記録」其三)

### おわりに

今回は婦人会の活動を中心に扱つた。そこで、婦人会について、簡単に紹介しておく。なお、巻末に「婦人会変遷概念図」を掲載しているのであわせて参照いただきたい。

昭和六(一九三一)年、文部省は「大日本連合婦人会」という全国団体を発足させた。これに対し、県は、鳥取県連合婦人会(大正九年結成)を直ちに解散させ、地域婦人会だけで作る新しい「鳥取県婦人会」を設立させて、大日本連合婦人会に加盟させた。

この結果、すでに軍事援護団体として、内務省の指導下

で結成されていた「愛国婦人会」(明治三四年結成)と、陸軍省の主導で結成された「大日本国防婦人会」(昭和七年)との三つ巴となつて、会員獲得や活動で競り合うようになった。戦争が拡大して軍事援護の仕事が増加するようになると、三団体の摩擦は一層激化し、三団体に重複して加入する女性が増えるなど弊害を生じた。そこで、昭和一七(一九四二)年、三団体を統合する形で「大日本婦人会」が発足した。しかし、戦況が悪化すると、大日本婦人会は国民義勇隊に編入され、敗戦直後の昭和二〇年九月、隊も解散となった。

「田中花子関係資料」には戦時の活動状況を示すものとして、「愛国婦人会湖山村分会会長」の委任状(昭和一〇年)や「大日本国防婦人会鳥取地方本部理事」の委任状(昭和一六年)等がある。花子も三団体と無縁ではなかつたのであるが、「人生記録」では、鳥取県婦人会と気高郡婦人会の活動として扱われている。

戦後の動きについては『鳥取県史』に次のように記載されている。

しばらく地域婦人会の系統組織は、中央はもちろん県段階でも、再出発の見通しは立たなかつた。(中略)しかし、二十一年ごろになると、次第に婦人会再建の動

このような社会情勢の中で、田中花子は新たな婦人会組織「気高郡連合婦人会」を結成したのである。その後、女性初の県会議員となった花子が発起人となり、「鳥取県婦人団体協議会」が結成され、さらに「鳥取県連合婦人会」の発足に至るわけである。

最後に、鳥取県連合婦人会の活動としての戦犯釈放署名運動について補足しておきたい。この運動は、昭和二七(一九五二)年八月に開始された。同年九月には、陳情のための上京費用捻出のため、一円拠出運動を決議し、総額五〇、六五一円の募金を集めた。上京は、一〇月二三日から二六日にかけて行われた。『10年のあゆみ』によると、その目的は、(1)三三、六〇五名分の署名を六大使館に提出する。(2)外務省に釈放促進方陳情を行う。(3)巢鴨拘留所への訪問、とある。ここで興味深いのが、澤田廉三の登場である。澤田廉三(一八八八—一九七〇)は、鳥取県岩



井郡浦富村（現岩美町浦富）出身の外交官である。公文書館では同氏に関する資料調査を四年間行ってきたが、この時のエピソードに関係する資料は確認されていない。ちなみに、当時の廉三は公職追放を解除され、鳥取から参議院議員選挙に出馬する予定で準備を進めていた時期であった。

#### 〈付記〉

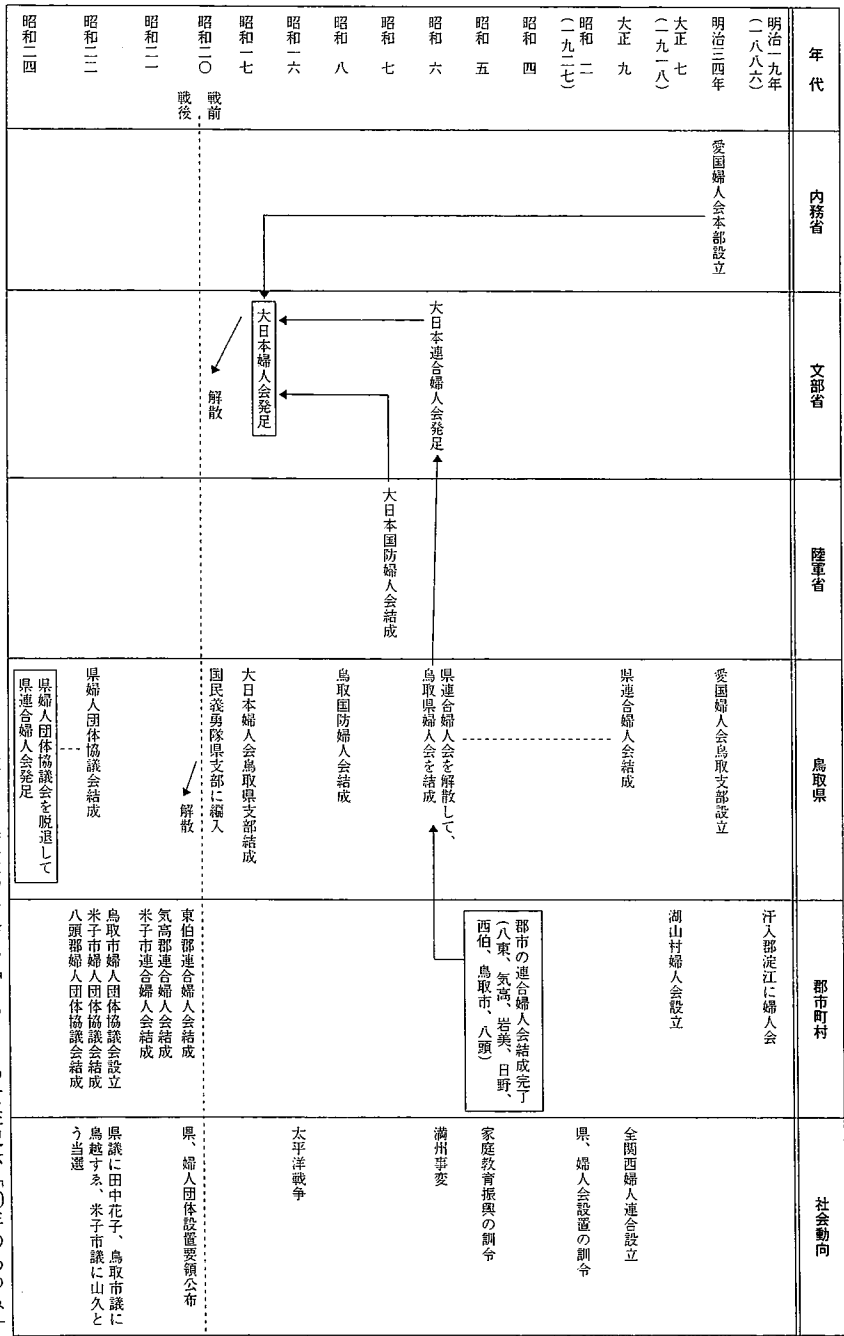
二回の翻刻を終え、調査不足を痛感している。特に実家の桑田家のこと、東京に引越した両親のこと、桑田家の家督を継いだ兄一家のその後のことなど、不明な点が多い。今後の課題としたい。

#### 【注】

- (1) 「昭和十一年頃」とあるが、『鳥取県史』近代社会篇には、昭和六年に県婦人会が設立され、同年開かれた第一回総会に、花子が演説をして満場の喝采を博するとの記述がある。（『鳥取県立公文書館研究紀要』第四号、注12）
- (2) 花子の実家は、東伯郡倉吉町（現倉吉市）大字魚町にあった。鳥取県立公文書館蔵「田中花子関係資料」によると、昭和三年、桑田家の両親は東京に転任とある。
- (3) 遠藤董（一八五三—一九四五）。鳥取市出身。鳥取高等学校校長の後、私立鳥取図書館を創設し館長となる。その後、私立鳥取女学校（鳥取県静修高等女学校）校長を務め、さらに私立鳥取盲啞学校を設立した。（『鳥取県百傑伝』）
- (4) 田中家の兄弟は、長男道夫、以下重道、義行、和俊、敏夫、正明、津満で7人兄弟妹である。長女雪子と末妹美代子がいたが、早世している。（『田中花子作成家系図』）
- (5) 貞（みさお）は花子の子で、一歳で亡くなる。『研究紀要』第四号に「田中花子略年表」を掲載しているが、ここでは貞の没年を大正一三年九月とした。しかし、「人生記録」によると、関東大震災の年で、また鳥取県会議員選挙の年であったとの記載があり、とすると、大正一二年九月の誤りと言わざるを得ない。また、花子が初めて演説をしたのは昭和三年であり、県婦人会総会で発表したのが昭和六年である。花子の演説が話題になったのが貞の死後間もなくという表現はいずれにしても適当ではない。
- (6) 田中永治（一八六七—一九三六）。道夫の父で県会議員。明治四〇年に鳥取県会議長も務める。また鳥取電灯会社（現中国電力）の創設者の一人で、第三代社長も務めた。（『研究紀要』第四号）
- (7) 花子が初めて女性の講演を聞いた、その壇上の人は、正しくは「久布白落実」であろう。久布白落実（一八八二—一九七二）は、熊本県出身で女性解放運動家として知られる。大正一五年六月、当時矯風会会頭であった久布白が来鳥し、遷喬小学校で「我国刻下の急務」と題して聴衆約三〇〇名の前で講演をしている。また、昭和四年六月にも来鳥してやはり遷喬小学校で講演をし、この時の聴衆約六〇〇名という。昭和一一年九月には米子でも講演をしている。（『鳥取教会百年史』日本基督教団鳥取教会）
- (8) 田中道夫（一八九三—一九五〇）。昭和二年九月二日に初当選を果たし、以後昭和二年一月三日まで四期、県会議員を務める。（『鳥取県議会史』別巻 鳥取県議会）
- (9) 道夫の選挙の三期か四期の頃という、昭和一〇年か一四年とということになる。昭和一〇年九月の選挙には二人の立候補が確認されるが、昭和一四年九月の選挙では山根繁己の立候補のみが確認される。花子が応援演説をしたのは、昭和一〇年の選挙と思われる。八頭選挙区は定員四名で、山根繁己が当選した。（『鳥取県公報 選挙告示』昭和一〇年・一四年）
- (10) 西垣寛治（一八九〇—一九三三）。政友会系の県会議員。昭和二年九月に初当選し、昭和一〇年九月まで二期務める。（『鳥取県議会史』同前）
- (11) 山根繁己（一八九四—一九七五）。政友会系の県会議員。昭和一〇年九月に初当選し、以後昭和二六年四月まで三期務める。（『鳥取県議会史』同前）
- (12) 黒田藤重（一八八八—一九四六）。民政党系の県会議員。昭和一一年九月に初当選し、以後昭和一七年一〇月まで四期務める。昭和一四年には県会議長も務めた。（『鳥取県議会史』同前）
- (13) 豊田収（一八八二—一九六九）。政治家。八橋郡由良村由良宿（現東伯郡北栄町）出身。昭和三年に衆議院議員に初当選する。（『昭和二年』山陰と中央とのパイプ役を果たした。（『大栄町誌』）
- (14) 『鳥取県史』近代社会篇によると、明治一九年に汗入郡淀江に婦人会が誕生している。会長・副会長とも婦人で、これが県下最初の自主的婦人会だとある。
- (15) 愛国婦人会は、内務省が指導する軍人援護団体である。県知事夫人が鳥取県幹事長、郡長夫人が郡幹事という形で、いわゆる上流婦人といわれた人々を中心としている。
- (16) 大日本国防婦人会は、陸軍省の監督指導下に結成された。事務所は鳥取連隊区司令部にあり、会長は元陸軍主計監婦人である。
- (17) 歩兵第六三連隊。大正一四年、第六三連隊は姫路の第一〇師団配下となり、鳥取県気高郡、東伯郡、倉吉も第六三連隊区管内となった。（『新修米子市史』通史編近代）
- (18) 注（一）参照
- (19) 同部分は、日光（村）の理事が太田みき、逢坂（村）が井山峯、向国安（村）が林愛子、青谷（町）が岸田テル、鳥取（市）が

- (20) 田蓑千枝という意味である。  
村上義孝は鳥取大学教育学部部長、黒田藤重は県会議長、鶴田憲次は県教育長となった人物である。(『研究紀要』第四号注17)
- (21) 昭和二十六年、中央において愛国婦人会、国防婦人会と地域婦人会を統合する決定が出され、鳥取では昭和二十七年に新発足した。(『鳥取県史』近代社会篇)
- (22) 『青谷町誌』(昭和五九年)には「昭和二十九年には、気球爆弾の原紙もつくれた。」という記述がある。
- (23) 「軍と政府の指導の下に、活動目標を勤労奉仕・軍事援護・貯蓄増強の三つにしようとした。こと日婦(大日本婦人会)の行なった、「必勝貯蓄」は解散までの3年間に、県下で貯蓄高が約八百万円に上り、立派な国策協力と賞賛された。」(『鳥取県史』近代社会篇)
- (24) 鳥取大震災は、昭和十八年(一九四三)九月一日午後五時半に発生した。震度六。被害は鳥取市を中心に死者一、二一〇人、被害家は全半壊を含め合計二七、七〇二棟に及んだ。夕食時で火災の被害も大きく、戦時下の県民生活に大きな打撃を与えた。(『鳥取県震災小誌』)
- (25) 『鳥取県史』近代社会篇に、大日本婦人会東伯郡支部の決議として、「戦時生活実践目標(七項目)を居間に掲げることあり、この一項目に「やみ取りきは売国行為です。やみを撲滅いたしましよ。」がある。
- (26) 池田紫星(一八九六—一九五六)。兵庫県出身。「因伯時報」の記者で、その後「日本海新聞」の主筆となる。(『鳥取県郷土が誇る人物誌』鳥取県教育委員会)
- (27) 近藤寿子(一九〇二—二〇〇一)。鳥根県出身で医師。鳥取市婦

婦人会変遷概念図



典拠：「鳥取県史」近代第四卷社会篇・文化篇、「新修米子市史」第三卷近代通史編、「とっとり女性の歴史」、「10年のあゆみ」

- 人団体協議会を結成し、一七年間会長を務めた。(ととりの女性史)鳥取県
- (28) 日立製作所のこと。「鳥取県史」近代社会篇には次のような記載がある。  
同年(二四年)日立製作所で、解雇者をめぐって大争議が起こったが、同社安来工場には、県西部からの通勤者が多かったため、西部の組合婦人部から県婦団協に、争議支援の要請がもちこまれた。ところが主婦や農村女性が多い郡市の協議会長は、これを拒否した。そして女子労働者が参加する協議会形式をやめて、戦前の地域婦人会の系統組織を再建することになった。
- (29) 『人生記録』には、婦人新聞に関するこれ以外の記述はない。
- (30) 井口寿賀野(一八九九—一九六〇)。東伯郡湯梨浜町出身。県連合母子会会長、県連合婦人会副会長、会長を務める。昭和二六年から三〇年まで県政史上二番目の女性議員となった。(ととりの女性史)鳥取県
- (31) 花子のノートには五ヶ国分の記載しかないが、鳥取県連合婦人会編「10年のあゆみ」により、オーストラリアを含めた六ヶ国であることが判明する。
- (32) 鳥取県連合婦人会編 昭和三五年発行